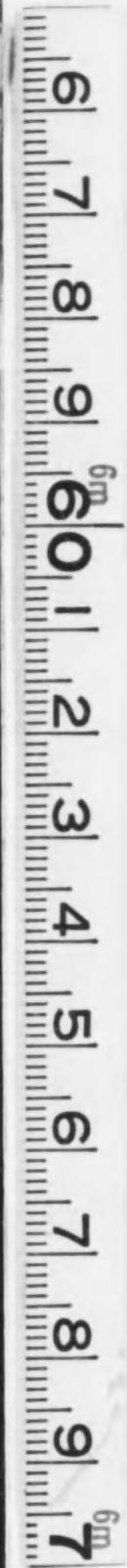


特261

686

歌舞伎  
十八番之内

矢の根



始





特 261  
686

一

歌舞伎  
十八番之内

矢の根

(脚本及演出)



役名

- 一 曾我五郎時致
- 一 大薩摩文太夫
- 一 馬士畑右衛門
- 一 曾我十郎祐成

持及持物

曾我五郎時致





大薩摩文太夫

昔時ハ文太夫直ニ舞臺へ出レト傳へ居リ又後見ガ

- (鬘) 七本ノ車鬘 割櫛ノ前髪
- (妝粧) 紅ノ筋隈
- (小道具) 三本太刀 大カブラ矢(家ニ傳ル物)
- (出道具) 櫓、盃ニ砥石、葎盆、煙管

(衣裳) 黒襦子ニ蝶ノ臺附ケ モニノ裾 蝶或ハ

三斗ノ巾松ヲ置タル緋縮緬ノ襦袢 胸當

小手 脛當(家ニ傳ル物) 帯海老茶ノ丸ガケ

袴 紫ニ淺黄ノ燃リ

兼テモ葎又ナシ

(衣裳) 三斗定紋ノ袴ノ下 黒羽二重ノ五ツ紋朱

縮緬ノ地袴、淺黄ノ附

(鬘) 銀杏

(小道具) 白木ノ臺ニ宝船ノ巻物及白扇 対 紫

ノ服紗 別ニ白扇

馬士畑右工門

(衣裳) 鉾仙夜女緬 草 土沓茶 腹掛黒ノ天

(小道具) 下ノ葎入 草鞋



銀 外ニ絞リノ下リ 同ク脚祥、手拭

〔鬘〕 秋代スィノ張リ

小荷駄馬ニ大根ヲ積置ク事

〔衣裳〕 着附火紅色縮緬ノ熨斗目入ノ模様千

鳥縫觀世水ノ袴紫ボカシノ千鳥模様ノ長

地祥淺黃縮緬

〔鬘〕 振打(或ハ前茶栓)

〔小道具〕 淺黃柄ノ小刀

以上

本舞臺三間高足ノ二重破風ヲ下ロシ前及上下トモ中  
松ノ揚々障子ヲ取り附ケ三方折返シ本様付キ紅白ノ梅ノ  
釣枝上手柴垣紅白咲分ケノ梅ノ立木(振出シノ仕掛アリ)  
下手ニ時代ノ藪疊(藪ニモ投込マレル仕掛アリ)兩段ニ富士ヲ  
見セタル背景トテ手淨瑠璃臺ニ大薩摩ノ連中居並ブ  
修羅嚙子ニテ幕開ク

口上ヨロシク有テ大薩摩ニカ、ル

大薩摩ノ去る程小曾我の五郎時致は惠方ニ向つてふ

との一と夫れ父の仇ハ俱ニ天謚和合樂壽福

開運萬卷の軍書窓の北面ハ残んの雪のほろ、



緑り春風春水一枝の梅くこつと開くらや花の春  
新し庵の物事小政すれども時致ハ今年も古  
庵ふる豊吉井といらし所ふて矢の根磨いて  
長こりけり

おれおて大い入ヨセニヤツテ障子とカル五郎一櫓ニ腰ヲ  
掛ケ矢屏風ヲ後ヨニ矢ノ根ヲ磨イテ居ル人形ノ様ヲ  
見セル

大薩摩一傳へ聞か養由が矢先ハ遠き高麗唐土近  
く和朝を尋ねれむ鎮西八郎為朝源三位頼  
政が古今無双の予執小も優りはするとお方ら

いと天性やい不敵の気丈者

ト矢の根を持ち所作何つて哥一ぱいお矢の根を

突いて表面を向き櫓ニか、リッラネニ成ル

(五郎)

虎と見てお田作り、やう贈、矢立の酢牛芳者人  
凝り大根一寸の鱈小昆布の魂たとは、右経節  
汁の鯨の威勢振ふとも我れ鯨鉾の飾り海  
老おはは親仁が譲りの面うつら、世とを  
籠子の蓋ちろり爛鍋文福茶釜毛拔き、鉄の折  
れまでも古金買ひ小遣羽子の一夜明ても回冬  
の鎖帷夜小手怪當すねらう予鱈も串貝も



取るふとられぬ酒屋の通いにて十七貫八百六十  
四文横小子の日の初寅もさうで貧乏するら  
は喰合のぬい福の神自問自答の悪態を申し  
て申さく先づ大黒は慮外者

大薩摩「とはどうぢや

（五郎）ハテ不断頭中を脱がぬはき

大薩摩「恵比壽は身持ちがうにきたぬえ

（五郎）とこさうぢや

大薩摩「ハテ鯛をお抱きの腋の下

（五郎）江戸前ふてもあらばおそ

大薩摩「精進日小ハ付き合これぬ

（五郎）昆沙門天の兜頭中用心過がて替陶し以

大薩摩「布袋はとぶつ福縁壽な

（五郎）月代剃る小手間あはる

大薩摩「市跡天は船漫頭浪乗り船の錢儲け

（五郎）諸けられうがられぬが苦勞にするは國土のたこ

け

大薩摩「富貴天小あり

（五郎）死生余あり

大薩摩「いづれ



(五郎) 祈る小

大薩摩「處あし実小顔面が随巻小

(五郎) 一瓢の飲一草の食

大薩摩「疏食を喰い水を呑み

(五郎) 肱を曲けて枕とす

ト矢ノ根ヲ持テ七神福ノ所作アリ

大薩摩「樂しみ莞々其の中ニ何るにすのほる安煙

草煙管おつ取り吸ひ付けて鼻の先なる春

霞打詠先つ、時致は寛々として居りける

ト此ノ哥一パイニ葎盆と煙管ヲ持テ前ニ座

ニテキマル

大薩摩「時小年始の門礼者素礼年玉挾箱三味線

箱の一調子声張り上げて物まう

(五郎) どうれ

ト文太夫通り神樂ノ鳴物ニテ出テ持ツテ出

タル白木台(中、白扇一對宝船)帛紗ヲ取り

テ前ニ出レ黙礼ヲシテ居ルヲ五郎迎えテ

大薩摩「大薩摩文太夫年始の御礼申あます

(五郎) 是れハ〜 早げゆとの出語り御太儀ニ存じ

また誠小年玉として末廣並ニ宝船先つと下



を教つてサ、奥へ祝ひませう

大薩摩「イヤ、さう致しては居りませう、此方々で御座  
れば猶永日の時を期し申るりと御意を得  
ませうぞ」

(五郎)「デモ一寸盃を」

大薩摩「イヤ、御免〜、春永小と云ひ捨て、おそま  
かへる

ト歌へ「パイニ下手ニ入ル五郎ソレヲ引キ留  
メ、氣ヲシラスル」

(五郎)「大薩摩、文太夫、此バ、おも時致ふ處へ祝ひて

く此るハテ奇特お男おやなア

大薩摩「其の時五郎年玉を開くや、扇宝船ハテ、其の  
ついたる年玉と正月心若翠ニとらう讀んで  
もなかつ、夜の下らう讀んでもなかつ、夜よとを  
の眠りのとろ〜とこし〜、なかつ、過ぎたる雑煮  
腹

ト贈ラレタ扇と宝船ヲヨロコシテ見ルコナシ、アツテ  
(五郎)「枕の下へおつて、敵祐経の首引ッ、おぬ〜  
夢でも見べ、か」

大薩摩「食後の一睡一樂と、砥石を掛い無造作、是



邯鄲の枕ぞと踏ん及び返へつて時致は  
ト五郎ハ砥石ヲ引キ寄セテ宝船ヲ其ノ下ニ  
敷キ

(五郎)

ヤツトコトツチヤウントコナ

トキバニナリ

大薩摩

「暫しまとろむ高嶽豊あの山は臥しけ  
れ

ト砥石ヲ枕ニ寢轉バ

大薩摩

「ア、ラ不思議や轉寢のめ、はら凄き風の脚  
じつちを踏まぬ矚影現ともあら夢ともおく

いと色青きか犯たる顔色いて舎兄十郎延成  
忽然と顛れせで

此歌の山且十郎上手の梅ノ木ニ振り出しこ来リ

テ出テ 豚鳥の桐方ニナリ

(十郎)

如何ニ時致せならずも今日祐経が館へ虜と  
かり籠中の鳥網裡の奥働うんのも力なし

急ぎ来つて急難を救ひ呉ルよこリヤ起

よう五郎起きよ時致

大薩摩

「といふよと思へば忽ち消えて形は失せいけ  
り



トドロくニナツテエノ處ニ入ル

大薩摩 一時致夢覺めおつくと起き、ほこりを見れど  
も人もおん忘然として居りける

ト五郎起き立ッテ

(五郎)

扱てハ夢中ニ兄祐成念力通じて急難を救  
ひられと告げ、るがたとは、祐経天へ昇ら  
は續いて舞り大地へ入れむ同じら分入列  
日本六十年形は目の何こり東は奥洲外  
濱

大薩摩 西は鎮西鬼島々島

ト下手ニ柱卷キノ見得

(五郎) 南ハ紀の路熊野浦

大薩摩 北ハ越路の荒海まで

ト上手ニ行き見得ヲナシ

(五郎) 人間の通はぬ處

大薩摩 一千里も行け

(五郎) 萬里も飛べ

ト舞臺へ飛び下り

大薩摩 「イデ追げんと時致が勢ひ進む様は仰ろ  
しかりける次第なり



ト花道ニテ向フ見込んデノ見得ヲナシニ重ニ  
引返シテ刀ヲ取リ抱ヘテ椽ヨリ踏ミ出シテ  
ノ見得ソレヨリ後口向キニテ後見ガ地祥ノ  
上ヨリ襟キヲ掛ケ刀一奪差シ込ム間相方  
ニテ継ク

大薩摩「可、る處へ向ふより馬附大根春商い大根く  
と呼ら来る時致かれをまつと見て是幸の  
肌背馬價は望み小仕にべし  
ト花道ヨリ馬士畑右門大根ヲ附ケル馬ヲ引  
キナガラ出テ人取様ノ振アリテ舞臺ニ抵ル

十

五郎立ッテ足レヲ見様先ニ出テ

(五郎) 馬借せ

大薩摩「其の馬借せよと近寄ルむ馬士も氣負つて  
根藉あり

ト五郎舞臺ニ下リ馬士ヲ上手ニ突キ馬ノ  
鬣を取ル馬士ハ下手ニキツトキマリ

(馬士) 下商ひ馬小乗らんとはびやうららいならぬ  
成らぬへぢ

大薩摩「びやうららいならぬと云ふ處を引つゝえんで七  
八間エイヤツと人取



ト馬士ハ馬ノ手綱を取ツテ行カ、ル五郎  
ハ馬ノ尾ヲ取ツテ引キ疾シ上手ニ追ヒヤル  
馬士ハ肌ヲ脱ギ鮮巻ヲシテ五郎ニ打ツ  
テ捕ル五郎ハ遂ニ馬士を下手ノ藪ノ中ニ  
放リ込ミ馬ヲ止手ヨリ引キツレ馬ニ乗リ大  
根一本ヲ持テ

大薩摩「手綱おの取りいらりと持来り手頃ハ大根  
千里が鞭

ト馬上ノ五郎表面ヲ向キ  
(五郎) 直ム小行けば五十町

大薩摩「廻らば三里ニヤ庄宇佐美久須美、向津が次  
男

ト歌「パイニ舞臺ヲ廻リテ

(五郎) 曾我の五郎時致が曲馬の程を恐れを見  
よエ、

ト大根ヲ振り上げテ見得

大薩摩「工藤が館へ急ぎしは中、しかりける次第  
なり

ト花道ニテ見得ヲナシ持タル大根ヲ鞭トシテ  
祓の或ノ鳴物相方ニテ幕一パイニ向フニ入ル



終

但し都合ニ歌ハハイニ舞臺ニテ大根ヲ  
振りトケタル見得ノ俵ニテ幕ニテモ  
シ

昭和五年七月八日印刷  
昭和五年七月十日發行

著作者

市川海老藏  
市川團十郎

東京市京橋區築地三丁目三番地

補修及  
訂正者

堀越福三郎  
堀越実子

古在所



無斷複製  
興行及上映  
ヲ禁ズ

版權及興行權

所有者

市川宗家

東京市京橋區築地一丁目三番地

堀越福三郎

右  
今所

堀越実子

東京市京橋區築地一丁目三番地

堀越福三郎



右  
今所

發行者及  
印刷者

堀越実子





終

